



るうてる



2015年
10月
No.814

■発行所 ■
日本福音ルーテル教会事務局広報室
〒162-0842 東京都新宿区市谷砂土原町 1-1
電話 03-3260-8631

■ウェブサイト ■ <http://www.jelc.or.jp>
■E-mail ■ jelc@jelc.or.jp

■発行人 ■ 安井宣生 koho06@jelc.or.jp
■印刷 ■ 精文堂印刷株式会社
■定価 ■ 1部 40円 (郵税を含む)
■振替口座 ■ 00190-7-71734

説教「これはいったいどういふことなのか」

日本福音ルーテル田園調布教会・日本ルーテル神学校 宮本新牧師

「人々は皆驚き、とまどい、『いったい、これはどういふことなのか』と互いに言った。」(使徒言行録2章12節)

人には自分の力(理性)で
知ることが出来るものとそ
うでないものがある。

ルターが気づいたことで
した。宗教改革に身を置い
て聖霊だけが教えるものが
あるとルターは悟ってゆき
ます。「私は何もしなかった
のだ。みことばがこのすべ
てを引き起こし、成就した
のである」(「四旬節第2説
教」1522年3月10日※)
と述べたのはそのような思
いからであったでしょう。

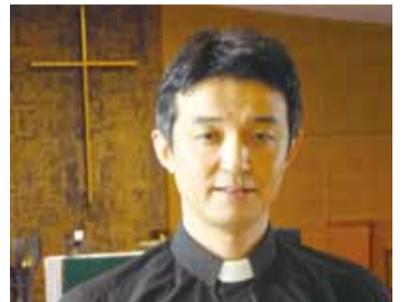


He Qi, Holy Spirit Coming (detail), © He Qi, 2013.

使徒言
行録2章
にある聖
霊降臨に
は「一同」
と呼ばれ
る聖霊が
降ったと
いう人々
のほか、
その傍で
「これは
いったい
どういふ
ことなの
か」と驚き
戸惑う人
たちがい
ました。この日から人々は
聖霊を受け、宣教に本格的
に乗り出します。主の言葉
を伝え、信仰の伝播がはじ
まります。しかし、そこに別
の人たちがいたことも使徒
言行録はきちんと述べてい
ます。最初の聖霊体験にこ
の人たちの戸惑いと驚き、
意外性とつまずきの体験が
含まれていることには大切
な意味があったと思いま
す。

もし仮に聖霊降臨が「一
同」と呼ばれる一部の人の
ちだけの話なら、当人に重
要であっても、他の人々に
はほとんど関わりのない話
です。聖霊降臨が誰にあつ
たかではなく、次に何が起
こったのが使徒言行録の
関心事です。そうして2章
から「一同」と、驚き戸惑う
人たちの物語がはじまりま
す。私たちはみな、この物語
を生かされているものでも
あるのです。

聖霊が注がれてこの人た
ちが気づいたことがありま
した。事の始めに、自分たち
の言葉と思いと計画を超え
ているものがあるという



相手があることに気づく時
があり、使命や託せられた
ものがあることを心で受け
止める時があります。それ
がなかったら教会や信仰生
活は、片方の翼で飛んで行
こうとするようなもので
す。初代教会でいえば、弟子
たちや周囲の人で、聖霊が
降った、恵まれたといつて
喜び祝い、やがてその人た
ちがいなくなれば終わって
しまう信仰です。

使徒言行録は人から霊へ
と視線を転じます。聖霊の
行先へと自らの歩みを重ね
てゆきます。2章12節のつ
まずきは、続く41節の教会
の誕生へと跳躍します。「ペ
トロの言葉を受け入れた
人々は洗礼を受け、その日
に三千人ほどが仲間に加
わった。彼らは使徒の教え、
相互の交わり、パンを裂く
こと、祈ることに熱心で
あった」(使徒2・41、42)。

使徒言行録は28章で終わ
りますが、この聖霊の働き
は終わっていません。その
つづきが次の世代の人々に
よって担われ、さらに福音
は手渡され、ここまでき
ています。そのはじめに主
の言葉があり、聖霊の働き
がありました。宗教改革5
00年の時を刻むとき、「聖
霊だけが教える」ものがあ
ることを心に留めたいと思
います。

私たちに教会の門をく
ぐったり、洗礼を受けたら、
新しい何かをはじめるとき
に自分なりの動機やきつか
けがあります。いろんな出
会い、導き、出来事がありま
す。いずれも大切ですが、聖
霊を軸に考えるとさらに大
切なことに気づきます。

そのはじめに神が事を起
されていた。それを測りが
たいものとしてキリスト者
は受け入れます。時に口こ
もりながら、時に迷いなが
らです。そして信じた通り
に生きて歩んでいこうとし
ます。そこに人の行き交い
があり、神の導きがあるこ
とを心の眼で互いに見よう
とします。

最初の聖霊降臨には異
なる人たちがいて、その日の
出来事にはつづきがありま
した。同様に、信仰生活には
自分を超えて、他者がいて、

各教区での宗教改革関連行事

- 九州教区 (熊本地区宣教会議)
合同礼拝
10月25日(日) 10:30 / 九州学院
説教 関満能師
- 西教区
西中国地区合同宗教改革日礼拝
(下関教会100周年記念礼拝に併せて)
10月31日(土) 10:30 / 下関教会
司式 竹田大地師 説教 小泉基師
- 北海道特別教区 (道央地区・NRK 札幌地区)
宗教改革記念合同礼拝
10月31日(土) 14:00
札幌教会札幌北礼拝堂
司式 日笠山吉之師、岡田薫師
説教 木村繁雄師(NRK 小樽オリブルー
テル教会)
礼拝後、吉田達臣師(NRK 大麻教会)
の講演と日笠山吉之師のミニコンサート
- 東教区
宗教改革合同聖餐礼拝
10月31日(土) 19:00 / 市ヶ谷教会
説教 徳善義和師

宗教改革500年に向けて

ルターの意義を

改めて考える(42)

鈴木 浩

「義という言葉は、ルターにとつて『つまずきの石』であった。『義』とは正しき、正義のことなので、人一倍罪の意識が強かったルターにとつては、この言葉は『裁き』という言葉と直ちに重なった。『裁き』は地獄の永遠の炎をイメージさせた。

修道会は、学歴が突出し、しかも真面目な修道生活を積み重ねているルターを新設のヴィッテンベルク大学の教師になるよう命じた。修道士には、上司からの命令に黙って従う他に選択の余地はなかった。

旧約聖書学教授になったルターは、1513年から詩編の連続講義を始めた。朝の6時からの授業である。その間の事情は徳善先生の『マルティン・ルター』(石波新書)に詳しいが、ルターはこの講義の際に、この「つまずきの石」に文字どおりつまずいてしまう。詩編31編2節(ラテン語訳)のことである。

そこには、「あなたの義によってわたしを解放してください」とあった。罪人である自分が神の正しきによつてどうして解放されるのか。彼にはどうしても分かんなかった。

しかし、長い苦闘の末に、この「つまずきの石」が「神学的突破」のきつかけとなった。

教会手帳 2016

10月1日発売予定



定価 1,100円

北東北キリスト教書局 (TEL:011-737-1721/FAX:011-747-5979)
キリスト教書局(山形) (TEL:03-3269-4490/FAX:03-3269-4491)
静岡支店 (TEL:054-260-6644 FAX:054-260-5612)
名古屋支店 (TEL:052-741-2416/FAX:052-733-2648)
広島支店 (TEL:083-228-4914/FAX:083-223-0951)
キリスト教書局(札幌) (TEL:096-3723-0303/FAX:共印)
日本福音ルーテル教会事務局 (TEL:03-3260-8631/FAX:03-3260-8641)



議長室から

た方や学習会で用いていただいた教会もあることでしょうか。

この宗教改革500年の事業を行う狙いをいくつかの切り口で説明して来ましたが、より皆さんに理解していただくために「教会の内」と「教会の外」と二つに分けて説明することになりました。

「ルーテルはルターのこと」

総会議長 立山忠浩



彼が指差した聖書のまことこの福音に出会う喜びを一緒に分かち合うことを目指すのです。

ただかなければなりません。この狙いは、教会の外の人をめぐり、聖書の福音に出会ってもらうことです。

10月はルーテル教会に属する者にとっては特別な月です。1517年のマルティン・ルターによる宗教改革が10月31日に始まったからです。

2017年の宗教改革500年まであと2年と迫って来ましたが、この記念事業は、すでに出版物の取り組みなどは始まっていますので、購入したい

弾として近々「統一バナー」が皆さんのお手元に届けられる予定です。全国の教会、施設、学校幼稚園・保育園で、このバナーを2年間設置していただくことを願います。

「教会の内」とは、教会に属し、教会の内にいる私たちのことです。私たちは、ルーテル教会に属していることの誇りと感謝の思いを強める機会としたいのです。ルターの書物と思想を学び直し、

れば、私たちの伝道の対象であり、教会に招きたい方々のことです。道行く方々に教会の門をくぐってもらうためには、まず教会の存在に気づいてもらい、さらに「入ってみようかな」という興味を持つて

共に、未来を切り拓くために」

第11回「つるるる」法人会連合総会報告

現地準備委員 高橋睦 (東京老人ホーム)

本総会は、「新しい宣教の展開」の先にある望む未来を、私たちは共にどのように切り拓いていくか、をテーマとして8月25～26日に、ルーテル学院(東京・三鷹)を会場に開催されました。

連合会会長である立山忠浩議長長の「神の霊が宿る器として」と題する説教で幕を開け、基調講演

は「少子長寿社会に求められる教育機関及び民間機関の役割」三鷹市で「と題し、三鷹市長であり、ルーテル学院大学客員教授でもある清原慶子さんをお迎えしました。三鷹市長として、未来に大きく明確なビジョンを掲げ、地域社会が一体となる協働を推進してきた実践とその成果をさまざまに示していただきました。法人会連合の課題解決に向けて、連携・協働を考えさせられる講演でした。

初日後半は、まずルーテルグループの4つの法人の実践報告で、キリスト教精神を理念に掲げたそれぞれの活動実践と、望む未来の目標、さらにそこに向かう現在に取り巻くさまざまな課題が報告され、現実の厳しさを実感しました。望む未来の実現について、ルーテルグループはどのよう

に取組めばよいのか、さらなる議論が望まれましたが、続きは翌日の分科会に引き継がれています。レセプションでは、ブラウンホールを会場に、50名の参加者が自己紹介をして、和やかに交流が深められました。

2日目、参加者は6グループに分かれ、それぞれの働きを踏まえながら、前日からの課題や未来について話し合い、相互に発表と話題共有がなされました。総会議長は、各法人会及び連合会諸委員会の活動報告がなされ、相互理解を深めた後、分科会からの提案や要望の実現に向けて、今後の各法人会・諸委員会、宗教法



次回は、宗

【写真右】

認定NPO法人
「いわき放射能市民測定室たちね」について

プロジェクト3・11
JELC 事務局

企画委員 李 明生

プロジェクト3・11
東日本大震災での福島第1原子力発電所事故から約3ヶ月後、地域住民の願いによって「いわき放射能市民測定室」たちねが発足しました。発足に際してはNCC(日本キリスト教協議会)ド

教会への支援の呼びかけに尽力され、JEDRO(日本キリスト教協議会エキュメニカル震災対策室)による最初の支援先となりました。ドイツをはじめ、北米、韓国、香港、オーストラリア、スイスの教会からの支援を受けて測定器が設置され、活動が開始されました。



東日本大震災から4年余りが経過し、日本社会の中では震災と原発事故の記憶は日々薄れつつあるようにも思います。しかし原発事故の影響はわずか数年で解消されるものではなく、これから何年も何十年もかけて向き合っていく必要があると思います。東日本大震災から4年余りが経過し、日本社会の中では震災と原発事故の記憶は日々薄れつつあるようにも思います。しかし原発事故の影響はわずか数年で解消されるものではなく、これから何年も何十年もかけて向き合っていく必要があると思います。

礼拝式文の改訂



⑱「礼拝式文の音楽」 (その3)

式文委員 松本義宣

中世の美しく華麗な「教会音楽」を司祭や音楽専門家が独占し、会衆はその視聴(とパンのみの聖餐)に終

始し、いわば礼拝の傍聴者にすぎない時代の中で、ルターは宗教改革が起ります。詳細は省きますが、会衆も参加できる教会音楽の創出、専門家でなくても、意符や字すら読めなくても、聞いて覚え復唱して「神の奉仕」たる礼拝に主体的に参与することができるようになります。

その際、すべて創作したのではなく、馴染みある伝統的な典礼歌の翻訳と改作、簡潔化から始まり、そこから、後に讃美歌に発展する「衆参歌」コラールも生まれます。複雑な「ミサ曲」から、会衆も一緒に歌うための試みは、『教会讃美歌』231〜235番にありますし、『讃美歌21』の86番はルター作の「神の小

羊(アゲヌス・デイ)です。同じく『讃美歌21』の25番(小米唱)「グロリア・パトリ」も、1524年の式文(ストラスブルク)で既に用いられたものですが、この二つは現在のドイツでも礼拝で用いられています。

ただ、重要なのは、式文もですが、当然音楽も強制や規範化、固定化をするものではなかったということです。福音、神の言葉の中心性を中心に置き、後はそれぞれの教会が、地域や文化や伝統に従って、歴史的経過によってその時に相応しく整え、用いていくのです。

そのような経過の中で、私たち日本のルーテル教会は、アメリカのルーテル教会の影響を大きく受けて「式文の音楽」を持って来ましたが、そのアメリカ教会も、移民国家として様々な影響下で成立、合同してきた経緯があります。

多くは北欧の教会に由来し、その北欧の音楽も中世のグレゴリオ聖歌やアンゲリカンの「チャント音楽」に起源があるようです。この小文で詳述はできませんが、現行の「青式文」Aに採用された、今最も馴染みのある音楽は、そのアメリカの「1958年版式文」から、以前の「茶式文」に採用されたものを、新たに編曲流用したもので、そのために現行の式文

が広く普及するのに寄与したと思われれます。Bは近代以降の調性を用いた小節線がある「有拍音楽」でフィンランドに由来しています。Cは、この青式文のために日本の新法法を用いて創作された新曲でした。

さて、今回の式文改訂にあたり、多くの方々の関心と興味は音楽にもあるようです。結論からいうと、創作をお願いしているセットは幾つかあります。が、結論は出ていません。というより、出すのは教会、会衆の皆さんという思いではないかとも思います。

そもそも、現在、ほとんどの教会で用いているA、これも絶対ではなく、私たちの文化や現状から見ても、そのままいいのかという問題があります。また「日本語を歌う」、このことも重要な課題が多々あります。式文を歌うとはどういうことなのか?そもそもAを私たちは正しく相応しく歌えているのでしょうか。せつかくのBやC、これも、その存在も知らない現状すらある私たちの「式文の音楽」も、自由闊達に様々なものを使用(試用)し、固定化ではなく「新しい伝統を造る」、私たちはまだその途上にあるのではないか、そう思えてしかたがありません。



連載 マルティン・ルター、人生の時の時(9)

江口再起

これまで、ルターの人々の時を、7つの局面に区切って学んできました。

- (1) 誕生(1483年、0歳)―「近代」という時代の幕開け
- (2) 落雷(1505年、22歳)―青年の危機(信仰の葛藤)
- (3) 塔の体験(1513年、1516年?、30歳ころ)―神の恵みへの開眼
- (4) 95ヶ条(1517年、34歳)―宗教改革運動の開始
- (5) ヴォルムス国会(1521年、38歳)―改革運動の前進(われ、ここに立つ)

- (6) 結婚(1525年、42歳)―生きることは、山あり谷あり
- (7) 死(1546年、63歳)―それでも、リンゴの木を植える

さて、最後に全体をまとめておきましょう。三点あります。

第一点、神の恵みがすべてだということです。「恩寵義認」です。

第二点、人生そして信仰も教会も山あり谷あり、その中で人間は生きること、死ぬことも受けとり受け入れ、それでもリンゴの木を植える。「受動的能動性」ということです。

そして第三点目。それはこの世界が「神のすばらしき創造の世界」だ、ということ。いろいろある、人生も信仰も教会も世界も。それでも人は生きてゆく、生きてよい(受動的能動性)。したがって、この世界はすばらしいということです。神が創造し、それゆえ救済してくださるこの世界。だからヒロシマとフクシマの後でも、明日はとも明るい日がくるのです。「恩寵義認」、「受動的能動性」、「神のすばらしき創造の世界」。ルターを学ぶということは、神の恩寵の下、明るく生きるということ。です。

梅雨空の7月4日、会場は東京教会に120名余の信徒が参加しました。私たちの信仰生活の中心の礼拝が宗教改革でどのように変わり、今に続いているのか、そして、現在検討されている式文改訂案をどう考えるのが興味深い課題でした。

第22回東教区宣教フォーラム報告
準備委員長 木村 猛
東教区宣教フォーラムは、2017年の宗教改革500年を踏まえ、昨年から「宗教改革を語る信徒になるうー」をテーマに開催しています。今回はこの「るうてる」にも掲載された江口再起先生のルター信仰の人生をめぐる講演「マルティン・ルター、人生の時の時」でした。今回は、その第2弾として「礼拝に生きるルター、心」を学ぶことにしました。

成り立ち、その中に宗教改革の真髄である「信仰のみ、恵みのみ、み言葉のみ」が生かされ、式文によって伝えられてきたことへの理解が、参加者のアンケートの回答によって確認されています。

検討中の式文改訂案に基づいた礼拝は、チャント(交唱)のメロディが完成していないので、言葉を唱えることよって進めました。アンケートの回答では、言葉を大事に受け取れた、おおむね良いというものが大部分であり、一部で順序(奉献の位置)について違和感があるというものがありません。500年

を記念して、もう一つの式文が与えられることを感謝したいと思えます。午後のワールドカフェ(6名単位の少人数での語り)では他教会の礼拝の様子、信仰生活の披露で話に花が咲き、旧交をあたため、他教会を知る良い機会でした。また、ルターが作詞・作曲したいくつもの讃美歌を松本牧師の解説とともに歌い、音楽のルーテル教会を感じる一時をも過ごすことができました。

次回は信仰の中心である「聖書」を取り上げたいと考えています。



「春の全国ティーンズキャンプ2016」in神戸
スタッフ募集のお知らせ

2016年3月28〜30日に神戸市立自然の家にて開催される、「春の全国ティーンズキャンプ」をアインズと一緒に過ごしていただくスタッフを募集します。

募集するスタッフは、リーダー、オーテイオ、マネージャー、賛美です。

詳細は以下のサイトよりご確認ください。
<http://tenet-gb.jp>

宣教室・NG委員会
ティーンズ部門

ルーテルこどもキャンプ

キャンプ長 高垣喜織
(三鷹教会)

第17回ルーテルこどもキャンプ「フレンドリーアイルランド〜トンガ王国へようこそ〜」が8月6〜8日にルーテル学院大学にて行

われました。今年も全国から小学5、6年生のキャンパーが26名、リーダーやスタッフ、ボランティアも合わせると総数約60名の仲間と一緒に3日間を過ごしました。

プログラム内容は「クイ

全国青年バイブルキャンプに参加して

河田礼生(三鷹教会)

今回のバイブルキャンプでは聖書について深く学ぶことができ、僕の聖書観や礼拝に対する考え方が大きく変わりました。

僕は生まれてすぐ洗礼を受けたクリスチャンだったため、教会でいろんな人のお話を聞いてきましたし、大学でもキリスト教や聖書について学んでいます。また

ズdeトンガ「トンガ王国体験ハイク」「トンガ王国クッキング」「トンガ人talka iさんファミリーのおはなし」など、出会う・考える・体験する・味わう・聞く・祈るといった様々な働きを通して学びました。とても暑い中でのキャンプとなりましたが、こどもたちの笑顔がいっぱいの3日間となりました。

キャンプのみなさんには、ひとつ宿題を出しました。「あなたの大切なものは何ですか?」という宿題です。家族、ペット、友達、命、神さま... たくさん大切なものを考えてきてくれました。私たちは、

日々の生活に追われて自分の大切なものを忘れてしまいがちです。このキャンプでトンガ王国について学びながら、トンガに住んでいるまだ会ったことのない友だちが大切にしているものは何か、私たちの大切にしているものは何かを今一度考える大切な時間となりました。そして、最後の礼拝では、神さまの大切なものは何かを思いおこし、主題聖句の「我らは神の中に生き、動き、存在する。」(使徒言行録17章28節)というみ言葉から、それはここに

いる私たちが、トンガにいる友だち、この同じ空の下にいるすべてのものなんだという思いをひとつにしたのです。みんなで神さまの恵みを分かち合うキャンプとなりました。

また、こどもキャンプはジュニアリーダーとリーダーの存在が大きな力となつていきます。若い彼らにとつても、キャンプでの経験は信仰の糧となったことでしょう。彼らの尊い働きに、心から感謝です。来年度は、あなたをお待ちしています!

最後にになりましたが、キャンパーを送り出してくださった各教会、教区のみなさま、スタッフのみなさま、そして神さまに感謝いたします。

高校生までは、ティーンズキャンプにも参加してきました。しかし、今回のキャンプはそのどれとも違う新鮮な学びのときとなりました。

まず旧約聖書を読むにあたって、今までは律法とか契約とか言われるたびに「つまらなさを感じていたのですが、背景と結び付けながら読むと、これまでとは違つた」とらえ方ができとても楽しく読むことができました。キャンプ後、旧約を読もうという意欲が掻き立てられました。

また、講師の久保彩奈先生のお話では新約の

世界観を変えられました。聖書の人物に自分を当てはめることはよくしてきましたが、自分の生活に聖書の出来事を結びつけることは、なかなかしてこなかったことでした。聖書の話や劇で再現することは昔からよくやってきたことですが、そのたびに新たな気づきや思いが生まれるので、とても良かったと思います。

二日目の夜の聖書黙想では一人でも同じ箇所を読み、新しい発見を見つたり、細かい疑問を

実践してみたりと

とても有意義に過ごせました。とても長い時間をとっているなと思つたのですが、足りないくらいでした。ただ黙想の後にもう一度意見を提示する時間が欲しかったと思

いました。同世代のクリスチャンと学べたこのキャンプはとても有意義でした。このようなキャンプに参加できたことを神に感謝いたします。

す。



「卒寿」なお「現役」

市丸清江、太田基、清野知佳子(藤ヶ丘教会)

「わたしは、皆さんのお支えのおかげで、教会へ通い続けられていられるのよ」と語る田中易子さんは、2月23日に90歳のお誕生日を迎えられました。田中さんのクリスチャン人生は、そのまま教会オルガニストの人生であり、藤ヶ丘教会の礼拝には、いつも田中さんの姿とお働きがあったのです。教会の女関には、ずっと以前から田中さんの描いた絵が飾られていて、皆さんを優しく迎えています。

藤ヶ丘教会の30年以上の歩みと共に教会生活を守られ、今なお自在に讃美歌を奏でてくださる現役のオルガニストですが、その田中さんが話してくださったエピソードをご紹介します。

ノの先生を探してください。二期は、神水教会のチーフオルガニストから、ピアノの指導を受けていたそうです。お母様の友人がクリスチャンだったことから、女学校時代にはお母様に連れられて聖書研究会へも出席しました。



礼拝で奏楽する田中易子さん

その後、女学校から芸大への進学を目指した田中さんですが、時代と人々の考え方は若い田中さんの味方をしてくれず断念。その後結婚と同時に西宮へでも教会とのつながりは絶えることなく、出産の際には牧師家庭のご協力を受けて、天王寺にいらしたこともあったそうです。

ご伴侶の転勤で上京落ち着いたところは、大岡山教会の一本裏の通り。「神さまは行く先々で、いつもうちのすぐそばに教会を用意していらしたの。」そう話す

田中さんは、27歳で受洗した後、大岡山教会で長くオルガニストを務められ、藤ヶ丘ではピアノ教師として自宅で指導にあたりながら、献堂時から教会を支え、毎週の礼拝に与りました。田中さんのご奉仕に改めて感謝すると共に、田中さんに素晴らしい才能を与えてくださった神様に感謝します。

2月15日の女性会の席上では、教会員の水野さんの手による紅白の絹地の折鶴と、皆さんからの寄せ書きのお祝いカードが、卒寿のお祝いとして送られました。ご自身について、いつも控えめに話される田中さんへ、同席された方々は、人生の素晴らしき先輩と受け止めたことでしょうか。

「卒寿」という言葉に相応しく、「子どもたちのことは、もう何も心配していないの。毎日、心穏やかに暮らしているのよ。」と優しくお話しになる田中さんは、立派に親業を遂げられ、思い煩う人生を卒業され、信仰生活の総仕上げの時期を迎えられたんですね。

文頭の言葉にあるように、礼拝への送り迎えをお手伝いする者にも心を砕いてくださる田中さん、クリスチャンのお手本の田中さん、そして先輩オルガニストの田中さん、いつまでもますますお元気で「現役」でいらしてください。